根を張るカジノと浅草の萌芽

―都市の文脈を受け継ぐ「カジノ × 都市型農園」の提案―

都市に残された自然の中に歴史的建築物が点在する台東区浅草。

浅草寺や浅草公会堂を有する歴史ある町並みの一方、
隅田川の向こうにはスカイツリーを望む。

下町文化と時代の最先端が混じり合う地で
この建築は枝葉を広げる木々のように空へと伸びる。

地面から持ち上げられたホールは会議やイベントに日々利用され、
ピロティはビジネスマンや観光客、地域の住民など
多種多様な人々が交錯する豊かな空間となる。

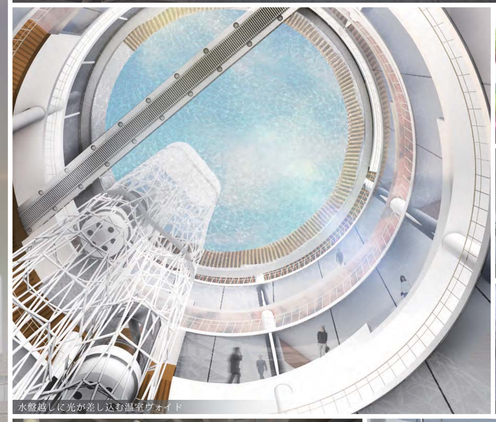
夜になると植物のカーテン越しに研究室の光が漏れ出し、
地下ではカジノが鮮やかに輝き、六区の町並みを再び照らし上げる。

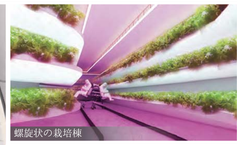
緑に覆われたカジノが、浅草の街に根を張る。

街から地下のカジノへのアプローチ

ヴォイドの終着点となる地下３階のカジノ空間

貯水池を兼ねた屋上の水盤


水盤越しに光が差し込む温室ヴォイド


螺旋状の栽培棟

浅草ブランドを発信する研究開発

ヴォイドを見下ろす

訪れた人を迎えるホワイエ

栽培された野菜を使用した食堂

市民に開かれたホール横のテラス

日常的に利用されるピロティ空間

季節により表情を変える緑のファサード

◆浅草の面影の再興とカジノの誘致

◇衰退した電気館と即席化された歴史

かつての浅草の賑わいは歴史ある土地柄に根付くものであり、人々の生活の結果としての文化が地域のアイデンティティであった。

江戸に遡ると、浅草は天保の改革にて弾圧された歌舞伎座の人々が結束した地であり、そこから芸能文化の発信地として発展を遂げてきた。

本計画敷地にかつて存在した電気館も、そうした歴史の中で生まれた、当時の最先端であり、名前につく「電気」も国力を増そうとする当時の日本が電気の普及を推し進めたことに由来する。

しかしながら、電気館は閉鎖し、後に反対運動を伴いつつ同敷地に建設された電気館ビル以降、面影は薄れていった。

現在、歴史の表層のみを楽しむインバウンドの増加もそれに輪をかけ、歴史と人々は益々乖離している。

◇日本におけるカジノの誘致

現在浅草に新しい建築の在り方を提案するにあたって、見せかけの観光地ではなく、人々の生活の表出を引き出すような場を設けたい。

土着のカジノという本提案は、日本においていち早くカジノを誘致することでかつてのような最先端の賑わいを取り戻すと同時に、浅草に中長期滞在の目的となる場を作ることで観光客と地域住民の距離がより縮まることを意図している。

2010 — 2015 — 2016. 3

超党派の国会議員による IR 議連が議論を開始

カジノ法案の再提出も審議は先送りに

IR の推進を担う特命チームが課題 2020 までの成立は困難に

カジノ法案の足掛となる「イメージの悪さ」
↓
地域社会に貢献する「クリーンなカジノ」のプロトタイプとしての提案

◆観光スタイルの転換と地域との協力

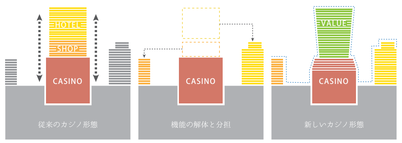
◇回遊型観光から滞在型観光へ

キメの細かい交通網が発達している東京では、高速バスターミナルなどが多く立地する新宿や池袋などに宿泊し観光地を巡る観光者も多い。歴史と下町の雰囲気が息づく浅草も、そのような通過点として人気の観光地のひとつである。

しかし本提案では、カジノは中長期の滞在の目的となり、このカジノは中長期滞在時のハブのような場所となりうる。この街に立ち寄る際、訪れるべきひとつの観光地としてではなく、ここをひとつの拠点として浅草に宿泊し浅草を巡るという、より地域に密着した観光スタイルを推進することでより高い経済波及効果を期待する。

◇従来の IR の解体と土着のカジノの運営スタイル

従来のカジノはホテルやレストランと一体となり、トータルとして収益を上げる事を目的としており、その利潤の循環も上下方向の繋がりが強いものであったが、本提案ではそうした機能を地域と分担することで利益を地域全体に還元する。地域との分担によって生まれた余白には浅草の街を象徴した、浅草のブランドとなるような新たな機能が付加する。ここではカジノの純利益によって研究開発を支援する運営スタイルを提案する。



◆周辺都市との連携と発信

◇学生と企業を繋ぐハブとしての場

◇浅草で MICE

MICE とは Meeting(会議)、IncentiveTravel(研修旅行)、Convention(国際会議)、Exhibition/Event(展示会・見本会)、を指す。カジノに併設したそうした行為の行える空間を有効に利用し定期的にイベントや会議を行うことで来訪者の増加を期待する。

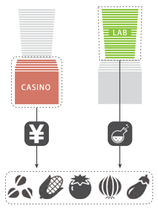
◆付加される研究開発拠点

◇カジノと複合する農業ビジネスの提案

深刻な食糧不足の到来が懸念される中、大都市でも生産可能な農業システムの開発に注目が集まっている。

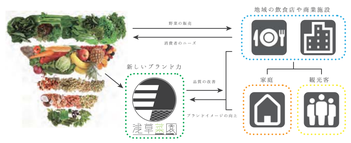
小面積でも日光より効率的に栽培することが可能な栽培用 LED による室内栽培や、データによる環境管理で安定した生産の維持など、ハイテク農業はいまや従来の農業よりも生産効率の高い手段となっている。その反面、技術開発や生産コストの高さが市場拡大の障害となっている。

本提案では、カジノによる収入によって技術開発・生産にかかるコストを補い、都市型農業の発展研究を行う。



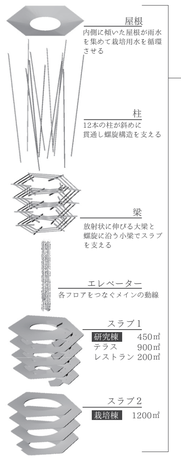
◇新たな研究開発から浅草のブランドを生み出す

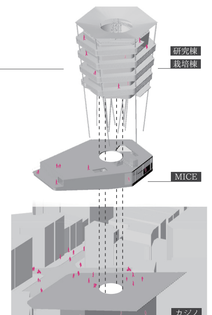
カジノを資金源として研究開発が進む都市型農園で作られた野菜類は、地域の家庭や周辺のレストラン、宿泊施設へ流通する。さらにこの街に訪れた観光客などを通して地域外へと広がることで、「浅草菜園」としてこの街の新しいブランドとなる。



◆空間構成

◇シンボルとなる都市型農園の提案



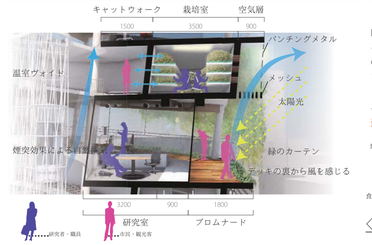


地上階は公開空地とし、地下にカジノ、２階以上に MICE機能と研究棟、栽培棟を配置する。

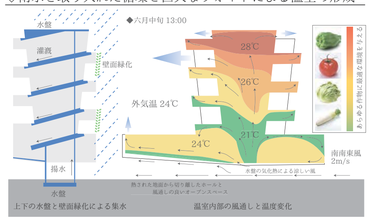
研究棟を主とするスラブと、栽培棟を主とするスラブによる二重螺旋構造となっており、屋上テラスまでの動線としても機能する。

◆持続可能な街づくりに向けての新たなビルディングタイプの提案

◇緑に覆われたオフィスとヴォイドによる風の通り道



◇雨水を取り入れた循環と巨大なヴォイドによる温室の形成



◇水負荷の小さい都市型農園の在り方

日本の仮想水輸入量は年間 831 億㎥に達し、国内消費量とほぼ同等の水を輸入しているとなる。都市農園は都市で食糧生産を行う過程そのもので我が国の食料自給に貢献するだけでなく、水を効率的に使うサイクルを提示する機能をも担う。

ホストレスが世界一である東京にシンボリックな都市型農園を建設することで、自然と共生する建築が広まることを期待する。

◇地域を巻き込む農業の六次化

hlc00039